

明日への学び

2014年 10月10日 発行
 発行：福井県教育委員会
 福井県学力向上センター
 TEL：0776-20-0295
 メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

地方からの発信②「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」 ～同時に浮かび上がる福井の課題～

全国学力調査の成績が先ごろ発表され、福井の学力は今年度も全国トップクラスの位置にすることが明らかになりました。全国学力調査が再開された平成19年度から、福井県は安定した成績を残し続けています。また、全国体力テストでも優秀な成績を収めており、学力・体力ともに全国トップクラスの成績を維持していると言えます。

県学力向上センターでは、平成25年度に、大阪大学人間科学研究科の志水宏吉教授を中心とする5人の調査グループに、福井県の学校調査を依頼しました。志水教授は長年、学力問題の研究に取り組み、2005年には、教育学を志す学生が一度は手にすると言われる名著『学力を育てる』を発刊されています。調査グループは、昨年度1年間で延べ100泊以上福井を訪れ、学校調査を実施しました。その調査結果をまとめた本が、今月10日に出版されました。今号では、執筆者である5名の方のインタビューを通して、その本の概要を紹介します。これまでの福井の教育について再確認する機会としてください。また、福井県に派遣されている県外教員による自主研究会『福井らしさ』を探る会」の様子、今月中旬に福井の教育について全国発信する場として開催される、福井教育フォーラムの概要もお知らせします。

好成績を受けて、福井の教育は全国から注目されてきています。しかし、この本の学校調査の結果や全国学力調査の結果から、課題もいろいろと明らかになってきました。たとえば、宿題の量が多く、やらせる指導も徹底している一方で、自主的・計画的に勉強することを子どもたちに指導できていないのではないかという点が挙げられます。また、学習に遅れがち子どもへの指導が手厚く、平均的に子どもたちのレベルを高めることに成功している一方で、突出した力を持っている子どもたちの能力を十分に伸ばせていないのではないかという指摘もあります。このような福井の課題についても、本号では問題提起をしています。福井の教育のよさを再認識すると同時に、浮かび上がってきた課題を確認し、解決策を講じていかなければなりません。福井の教育のよさを福井の教員自身が理解して全国に発信していくとともに、問題点を直視し、これからの「福井の教育」の進むべき道についてしっかり考えてみましょう。

<目 次>

○福井調査からみてきたもの～志水宏吉氏～	P 2	○報告「としま教育フォーラム」	P 11
○執筆者インタビュー～川畑・野崎・中村氏～	P 4	○連載「希望学」⑥～宇野重規氏インタビュー～	P 12
○福井の教育 発信のポイント～前馬優策氏～	P 6	○報告「中高授業改善事例に関わる公開授業⑤」	P 13
○おしらせ「福井の教育本発刊予告」	P 7	○おしらせ「福井教育フォーラムの開催」	P 14
○報告「福井らしさ」を探る会	P 8	○おしらせ 教育研究所通信型研修など	P 15
○浮かびあがる福井の課題	P 10		

全教員向け

福井調査からみえてきたもの

～福井調査プロジェクト代表 志水宏吉氏にインタビュー～

志水宏吉教授をリーダーとする大阪大学の研究グループ5人は、平成25年度に、延べ100泊以上にわたって福井調査を実施し、福井の教育をアカデミックに調査・研究した本を執筆されました。その本が、10月10日に発刊されました。はじめに、この福井調査プロジェクトの代表である、志水宏吉氏のインタビューをお届けします。（「発刊された本」については、以下「本」と記します。）

志水 宏吉（しみず・こうきち）

大阪大学大学院人間科学研究科教授。兵庫県西宮市生まれ。
 東京大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）。
 1986年大阪大学人間科学部助手。1994年大阪教育大学教育学部助教授。
 1996年東京大学大学院教育学研究科助教授。
 2003年大阪大学大学院教育学研究科助教授。2004年から現職。
 著書に「変わりゆくイギリスの学校」、「公立小学校の挑戦」、「学力を育てる」、
 「公立学校の底力」、「つながり格差が学力格差を生む」など。
 共著に「学力の社会学」、「学力政策の比較社会学」など。
 福井県学力向上センターアドバイザー。



○福井調査の方法

私どもの調査は、フィールドワーク（参与観察）とインタビュー（聞き取り）という主に2つの方法をとっています。実際に教室に入らせていただいて授業の様子を観察したり、休み時間や給食、朝の会、帰りの会、部活動など、学校のあらゆる様子を観察したりしています。現場の先生方にはご負担になる部分もあるかと思いますが、できるだけ長い時間を福井の学校で過ごすのが我々の目標でした。また、先生方、子どもたち、地域・保護者の方、有識者などの方を対象に、インタビューもさせていただいています。こうして実際に見たり聞いたりして得られたさまざまな情報から、浮かび上がってきたものをまとめていくのが、私どもが長年行っている調査のスタイルです。

教育機関もいろいろありますが、全国学力調査の対象校が小学校と中学校ですので、小学校・中学校をメインに調査しました。福井の場合、嶺北と嶺南でそれぞれ特色がありそうですので、小学校・中学校とも、嶺北と嶺南で1校ずつ（合計4校）を重点的に調査しました。「できるだけ長く」ということで、1週間の調査を各校2回ずつ実施しました。今回の調査に際しましては様々な方にたいへんお世話になりました。ご協力いただいたみなさま方に、この場をお借りして、あらためて感謝申し上げます。

○「教育社会学」とは

私の専門とする「教育社会学」とは、教育が個人および社会にとってどういう役割を持っているのかを、実証的に明らかにする学問です。私は現在、おもに二つのテーマで研究を行っています。

一つは学力問題です。2000年ごろ「学力低下論争」が起りましたが、実際に調査をしてみると、学力分布は2コブ状態でした（福井は下位層が少ないので1コブ状態だと思います）。勉強しない（やれない）層が増えていて、学力格差が広がっているという実態が明らかになり、この格

差を縮めるためにはどうしたらよいかという課題を探究していくことになりました。具体的には、2006年の学力実態調査で好結果が見られた大阪府の小学校5校、中学校5校について2007年度の1年間をかけて調査し、2008年に結果をまとめました。これらの研究成果は、「学力を育てる」「公立学校の底力」などにまとめてあります。2007年以降は秋田、福井、香川の調査も実施し、「学力政策の比較社会学」を発刊しています。

二つ目は「ニューカマー（外国人）の問題」です。外国籍の子どもたちをサポートする方法について、フィールドワーク調査に基づき、課題と可能性を探っています。外国人への教育支援は現在も継続中で、公立学校だけではなく、外国人学校の調査も同時に行っています。

○福井の教育のよさーキーワードは「群れる力」と「鍛える文化」

福井の教育のよさはと聞かれても、「あたりまえのことをあたりまえにしているだけ」というのが福井の先生方の印象だと思います。学校や家庭で子どもたちが「あたりまえ」にすべきことは全国共通ですから、なぜ福井でできて他地域ではできないのか、他の地域の先生方も基本的にはまじめなのに、福井ではいったい何が違うのか、という疑問の声をよく聞きます。今回の調査を通して、福井の「あたりまえ」は、それを徹底する度合いが高く、あたりまえのことをあたりまえにやれる社会環境が整っていることがわかり、それこそが福井の教育のよさであると感じました。

1990年代以降、「指導」から「支援」へというコンセプトが広がって教師が優しくなり、全国的に「厳しくしつける」ことをしない教育になってきました。ところが福井では、伝統的な「鍛える文化」が健在で、うれしく感じました。典型的な例が「無言清掃」であり、*B小学校の「遠泳」だと思います。

福井は、地域・家庭の安定した構造の中で、子どもたちの「*群れる力」が自然に生まれ、学校の「鍛える文化」の中でそれらがさらに研ぎ澄まされています。

「本」では、これらについてフィールドワークをもとにしてまとめています。

※「B小学校の『遠泳』と「群れる力」については、「本」の中で、詳しく記されています。

志水宏吉教授の「運命の出会い」

<全寮制の高校で学問に導いてくれた先生に出会う（本人談）>

私は材木屋の長男として兵庫県西宮市に生まれました。地元の高校には進学せず、「おもしろそうだなあ」という感覚くらいで岐阜県の山奥の男女共学の全寮制の高校に進学しました。入学当初は大好きなサッカーに熱中していましたが、1年生の途中、開学以来初の東京大学合格者を指導したS先生から「志水君、私と一緒に東大に行く気はないか？」と誘われました。進路について真剣に考えたことはなかったのですが、高い目標を掲げられて、「チャレンジしてみよう」と決意しました。S先生は、勢いのあるオパチャンという感じの英語の先生で、先生の指示を守れば大丈夫という安心感があり、尊敬できる先生でした。英語はもともと得意でしたが、授業外でも鍛えていただき、自信が持てるようになりました。また、S先生は大学で近代史を学ばれていたようで、さまざまな機会に豊富な知識を披露され、それによって私の海外への思いや学問への憧れが培われました。S先生との出会いがなければ、全く別の人生になっていたと思っています。

○「群れ」と「不易」からみる福井の課題

「群れる力」は福井の強みですが、同時に、群れから出て「交わる力」をどう育てていくかは改善の余地があります。地域・家庭の安定した構造の中で健やかに育っている福井の子どもたちですが、能動性を育み、将来の自分をしっかり見つめていけるような道筋が必要かもしれません。

「不易と流行」という言葉がありますが、教育において、より重要なのは「不易」の部分です。日本社会はこの半世紀で劇的な変貌を遂げていますが、教育の大切な部分はそれほど大きくは変わっていません。福井の教育には、その「不易」の部分が色濃く残っています。しかし今後は、この「不易」の部分さえも変化していく時代がやってきます。福井の教育の良さにあぐらをかくことなく、先を見据えた上手なかじ取りが必要となってきます。

これらの福井の課題については、「本」の終章でまとめてあります。

(平成26年7月29日 ご本人にインタビュー)

全教員向け

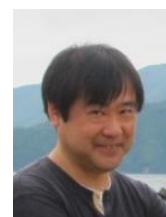
福井の教育の印象と 「本」の読みどころ

～小学校・中学校・教師に密着調査した方々に聞きました～

「本」は序章、1～4章、終章にわかれています。1～3章を担当したのは、大阪大学で志水教授の研究室で学ぶ大学院生である、川畑和久氏、野崎友花氏、中村瑛仁氏の3名です。独特の経歴を持つ3名の方に、それぞれの担当から福井の教育に密着した印象と「本」の読みどころをお聞きました。

川畑 和久（かわばた・かずひさ）—小学校教育の調査を担当—

1960年兵庫県西宮市生まれ。中学校入学時から福岡県に転居。福岡教育大学卒業後、2011年までの27年間、福岡県田川市で小学校教員を務める。2012年4月から、大阪大学大学院人間科学研究科前期博士(修士)課程入学、2014年3月修了。現在は同研究生。



○「一時一心（いつときいっしん）」—その時その時を一心にやる福井の子どもの姿

事前調査で訪れた教室で、全生徒の背筋がきちんと伸びている姿に驚きました。福井の学校文化の浸透を感じた瞬間で、今でも鮮明に覚えています。本調査では、B小学校の体育が印象に残っています。私の知る標準的授業の1.5倍から2倍の密度に感じました。またB小学校のS君の「学びへの渴望」も印象的でした。「間違っても何度も発表し、周囲の子の指摘を受けて納得する」の繰り返しで、教室には安心して自分の考えを発表できる雰囲気がありました。ほかに、無言清掃、遠泳、放課後の補充学習などが印象的でした。福井調査では、子どもたちが今一時を一心にやり遂げようとする姿をあらゆる場面で目にしました。「本」ではこういう点を書かせていただきました。

○福井の強みを理解して、地域・保護者とともに創る教育を

A小学校の近隣の保育園を訪れて、保育園のレベルの高さも感じました。遊びの中にも「学び」があり、「小1プロブレム」の心配は少ないと感じました。福井の先生は、みなまじめで熱心ですが、この「本」を通して、福井の強みが何であるかを理解していただきたいと思います。そして、地域や保護者の力もあらためて感じ、教育を学校という閉じた世界で納めないでいただきたいです。

私は4年前に、27年間務めた小学校教員をやめて、研究の道を志しました。「弱い立場の子どもたちを助きたい」という思いで小学校の教員になり、現在は、子どもたちを取り巻く差別の問題などをなくしたいという気持ちで勉強に励んでいます。福井は同和問題や人権教育については、私の地元の福岡と比べて、苦労はそう多くないと思います。恵まれた環境の上で成り立っている福井の教育の強みについて、今一度考える機会としていただければと思います。

野崎 友花（のざき・ゆか）—中学校教育の調査を担当—

1981年大阪府枚方市生まれ。2006年立命館大学大学院言語教育情報科英語教育学コースを終了し、2006年から大阪府寝屋川市で中学校教員を6年間務める。2012年4月から、大阪大学大学院人間科学研究科前期博士(修士)課程入学、2014年3月修了。現在は同後期博士課程(D1)に在籍。



○「教科教育」を補う「教育社会学」

私は、大学卒業直後に入学した大学院では、英語教育の授業スキルを学びました。その後、中学

校で6年間勤務しましたが、「※効果のある学校」を凝縮して学べた、中身の濃い6年間でした。中堅層の教員が少ない学校だったため、20代で学年主任や研究主任も務めました。

同じ先生が同じ授業をしても、子どもが変われば全く違う授業になります。もちろん生徒に応じて授業のやり方を変えるのが教師の力量ですが、その子どもたちの「違い」を理解する根底にあるのが「教育社会学」であり、中学校教員の経験の中で、それを学ぶ必要性を感じました。研究の対象として学校を見る興味深さにひきつけられて、大阪大学で学ぶことになりました。

※もともとはアメリカのロナルド・エドモンズが研究を始めた。志水宏吉教授らは日本版「効果のある学校」について研究し、「学力を育てる」などで、研究成果を明らかにしている。

○信頼関係に立脚した徹底した指導

福井の中学校調査でまず感じたことは、教師が、きめ細かく丁寧な指導していることです。さらに生徒に対する要求レベルが高く、それを徹底してやらせるのが福井の学校文化だと感じました。そのような状況でも、生徒は「やらされ感」をそれほど強く感じていません。教員と生徒に信頼関係という強い絆があり、それに立脚した指導だからこそ教育効果が上がっているのだと思います。このあたりのことを、「本」では「ケアリング論（関係）」にふれながら書かせていただいています。

今回調査に入った学校では、「無言清掃」や「昼休みのフォークダンス」など、他地域の方から見ても「珍しい」取り組みがあります。しかし、これらの取り組みには必ずメッセージが隠されていますので、このあたりも「本」から読み取っていただけると幸いです。

中村 瑛仁（なかむら・あきひと）—教師教育の調査を担当—

1985年福井市生まれ。藤島高校出身。福井大学教育地域科学部在学中に、アメリカサウスカロライナ州クリムゾン大学に1年間留学。2007年同大卒業後、大阪大学大学院人間科学研究科前期博士（修士）課程入学、2014年3月修了。現在は同後期博士課程(D4)在籍。



○米留学中に「学力を育てる」を読み、進学を決意

わたしは福井大学在学中に、交換留学生として1年間アメリカに留学する機会を得ました。そのとき日本から持参した書籍の中に、志水宏吉先生の「学力を育てる」があり、それを読んで大阪大学人間科学研究科への進学を志しました。高校時代の担任のところに進路相談に行くと、教員採用試験と大学院入試の二兎を追うのではなく、本命の大学院入試に専念すべきだと背中を押され、その結果、大学院入試にパスすることができました。現在は教員の働きがいの量的研究、マイノリティ（教育弱者）を支える新しい専門性のあり方などを研究しています。

○「格差」の小さい福井

調査に入る前に、全国学力調査の結果が全国平均を下回る学校が、福井県にはほとんどないことを知りました。私自身福井県の出身ですが、自分が受けてきた教育の質の高さに驚きました。子どもたちの格差が小さいのはもちろんですが、教員間の格差も小さいと感じています。人間としての個性には差がありますが、全体としての均一性が存在するのです。その均一の水準も高く、さらに教員集団のまとまりが強固です。このような福井の教員の水準とまとまりは、一朝一夕でできあがるものではありません。先輩教員たちが脈々とつなげて（継承して）きた結果であると感じました。

福井調査を通じて、福井の教師の特長をあらためてまとめました。ご存知のことも多いと思いますが、この機会に是非、自分たち福井の教員の特長を再確認していただけたらと思います。

（3氏とも、平成26年7月29日 ご本人にインタビュー）

全教員向け

福井の教育 発信のポイント

～「本」の共編著者 前馬優策氏にインタビュー～

最後は「本」の共編著者の前馬優策氏です。前馬氏は今回の福井調査では、4章の地域・家庭教育を担当しました。今回のインタビューでは、福井の教育の発信ポイントについても話をうかがいました。

前馬 優策（まえば・ゆうさく）

大阪大学大学院人間科学研究科講師。1983年大阪府茨木市生まれ。

2006年大阪大学人間科学部卒業後、同大学院人間科学研究科博士前期(修士)課程に入学。

2008年同後期課程に入学。2012年4月から甲子園大学総合教育研究機構助教。

2014年4月から現職。共著に「学力政策の比較社会学【国内編】」、「学力政策の比較社会学【国際編】」。



○研究分野

私は、教育社会学の中でも「言語コード論」について研究しています。大学院時代の研究テーマは「家庭環境が子どもの言語運用および学力に与える影響」でした。簡単に言うと、「言語」を切り口とした学力格差についての研究です。また志水教授らとの学力問題に関する共同研究は引き続き行っています。今回のような、志水教授と2人での共編という形で出版するのは初めてです。

○学校が学校であり、教員が教員である

地域という学校教育を支える地盤は、価値観やライフスタイルの変化にともない、確実に変化しています。その変化の波は福井にも及んできており、心配な部分もあります。そういう状況であるからこそ、この「本」が、「古いから今の時代に合わなくてだめだ」ではなく、古い中の良かったことを見直すきっかけになればいいと思います。「本」を全国の方に読んでいただくうえで、このあたりが一つのポイントとなるのではないかと感じています。福井は学校が学校であるし、教員が教員であります。学校や教員の領分が守られています。たとえば大阪から見ると、「もう（福井の状態には）戻れない」と思ってしまうのですが、このような福井の状況が、新しいものを築くきっかけになってほしいと思います。

○ハードルを高くし、頑張っている姿を地域に発信

最近の（とくに都市部の）流れは、子どもにおもねる部分が多く、子どものニーズに合わせすぎている嫌いがあります。ハードルをどの高さに設定するかが大切で、福井の場合、生徒のハードルも高く、その高くしたハードルに応えるべく先生のハードルも高くなっています。生徒のハードルだけ高いと「そっぽを向く」（ハードルをこえようとしない）状態になりますので、そのあたりのさじ加減は大切ですが、先生自身がハードルを高くしている姿も生徒は見ていますし、先生は子どもたちに愛情を持って接しているので、子どもたちもハードルを乗り越えようと頑張ります。福井の教員は、子どもたちに「みんな（も）できる」というメッセージを常に発信しています。

全国的には、地域のクレーム対応に苦慮しています。福井の場合、このような子どもや先生の頑張る姿を上手に地域に発信しています。学校情報の発信を意識して、地域に対してオープンな姿勢を見せています。私どもの「効果のある学校」研究でも、地域の人とどういう関係を築けるかを、

大きなポイントに挙げています。福井には地域と学校に適度な緊張関係があり、学校と保護者（地域）を行き来するツールを上手につくって、活用しています。

○「福井の教育」で全国発信すべきこと

福井の教育について、全国発信する際に、「福井だからできる、自分の地域にはまねできない」と感じてしまっただけでは、発信しても受け入れられません。福井でなくてもできる（参考になる）ことは実はたくさんあります。その例として、次の3つを挙げてみます。

①規準を明確にする

生活指導規準、学習指導規準など、規準と言ってもさまざまにありますが、福井の場合、いずれを見ても「合理的な配慮のもと」つくられた「あいまいでない規準」が浸透しています。学校内で統一した認識があり、「ぶれない」ことが大切です。福井の場合、このあたりのまとまりが他地域と微妙に違って、あらためて意思統一しなくても、勝手に統一規準が教員の中に染みついていく感じがします。この点はまねできないかもしれませんが、他地域でも、意思統一しながら規準を明確にすることは可能です。

②地域の役割

地域の役割は、「①学校を支える」「②学校について知らせる」「③学校へ呼び込む」の3つが考えられます。とくに、②は、学校の情報を地域で話して広がっていくことにより、学校への理解が深まります。③は地域のみならず積極的に学校に関わる場ができていくことを意味します。

これらのかたちができるためには学校だけの力では限界があります。地域の力を巻き込むことが必要で、そのあり方は、都市でも田舎でも参考になるのではないのでしょうか。

③がんばればここまでやれる

遠泳や昼休みのフォークダンス、コンクールの多さ、集会の静かさなど、調査を通してみてきた印象的なことはたくさんあります。これらのことは「福井の純朴な子だからできる」というわけでは決してありません。このような「全員でやり遂げる」ことを、福井はどのようにやっているのか、どう活躍の場を与え、自己肯定感を育てているのか、を研究して発信していくことができるはずですし、他地域の方にはこのあたりをよく見ていただけたらと思います。

(平成26年7月29日 ご本人にインタビュー)

お知らせ

ついに 発刊！！

「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」



共編著 志水 宏吉 前馬 優策

出版社: 中公新書ラクレ

定価: 780円 + 消費税

10月10日より県内取扱書店で販売開始!

報告
全教員向け

「福井らしさ」を探る会

～県外からの派遣教員による自主研究組織～

本年度、福井県に他県から6県8名の先生方が派遣されています。その先生方で、福井県と派遣元県とのさらなる向上を目的に、各校で得た情報を共有しながら「福井ならではの特色（福井らしさ）」を探ったり、派遣元県の特色ある取組みを情報交換したりする自主研究会がたちあがりしました。鳥取県から県教育庁学校教育政策課に派遣されている岸田靖弘主任が発起人となり、昨年度、福井県から東京事務所に1年間派遣されていた戸羽嘉和教諭（現在は学校教育政策課企画主査）も加わって9名で組織されています。第1回は結成趣旨の確認などの内容で6月4日に開催され、第2回は国立教育政策研究所の千々布敏弥総括研究官にアドバイザーをお願いして、7月22日に開催されました。本格的な議論が始まった第2回の様子を報告します。

構 成 員

茨城県 石崎 裕美（敦賀市立中郷小学校）	高知県 中村 大（福井市明倫中学校）
茨城県 志村 美香（福井市成和中学校）	高知県 鈴江 暢朗（越前市武生第一中学校）
長野県 松田 透（あわら市芦原中学校）	熊本県 芹川 博文（勝山市立勝山中部中学校）
奈良県 水谷 雅美（鯖江市神明小学校）	鳥取県 岸田 靖弘（県教育庁学校教育政策課）
	福井県 戸羽 嘉和（県教育庁学校教育政策課）

第2回概要

日時：平成26年7月22日（火）17:30～19:00
 場所：福井県庁1101会議室
 自己紹介
 協議 趣旨・活動計画について
 福井県の学習指導・生活指導について
 ※グループ別協議のあと全体協議
 指導・助言 千々布敏弥 総括研究官より

千々布敏弥氏の経歴

国立教育政策研究所教育研究情報センター総括研究官。
 1990年九州大学大学院博士課程中退、文部省入省。その後私立大学教員を経て、1998年に国立教育研究所（現・国立教育政策研究所）に勤務。2000年に、内閣内政審議室教育改革国民会議担当室併任。2003年に、米国ウィスコンシン州立大学へ在外研究。2007年国立教育政策研究所研究企画開発部総括研究官。教員免許更新制の導入に関する検討会議委員、学校評価の推進に関する調査研究協力者会議委員、指導が不適切な教員に対する人事管理システムのガイドラインに関する調査研究協力者会議委員。著書に「教師のコミュニケーション力を高めるコーチング」など。（e-hon HPより）

○「福井らしさ」を探る方法（活動計画の確認）

- ・日常業務の中で「福井ならではの特色（福井らしさ）」だと感じる点を記録（紙面：写真）する。
- ・「福井らしさ」の特徴を、①学習指導について、②生活指導について、③組織・研究について、④家庭・地域について、⑤その他に分類して整理する。
- ・記録をもとに福井の教育の長所や短所をまとめ、派遣元県の取組みと比較することにより、福井県の教育の特長や課題を明らかにする。
- ・千々布敏弥総括研究官にアドバイザーをお願いし、随時、指導・助言をいただく。
- ・国立教育政策研究所の指導主事研修会で研究成果を発表し、福井の教育をさらに伸ばす方策や課題の改善策について、参加者と意見交換を行う。

○福井県の学習指導・生活指導について（協議）

まず、参加者をA B 2つのグループに分け、Aグループは学習指導について、Bグループは生活指導について、協議内容を模造紙に書き込みながら協議しました。次に、グループごとの協議内容を全体に発表し、その内容について、参加者全員でフリートークを行いました。協議の中で挙がってきた内容と、千々布総括研究官の助言について、下に記します。



グループ協議の様子（左は千々布総括研究官）

<福井の教育－学習指導について>

小中連携について 小中学校間での教員の人事異動が盛んである。多くの教員が、小中高の教員免許を持っている。／授業規律、挙手の仕方、言葉遣い、拍手などが小中学校で統一されている。小学校でやっていたことが中学校でもそのまま引き継がれているので、中1になったときの混乱が少ない。

学習規律について ノーチャイム、2分前着席が定着している。／教員も授業時間前に教室に入っており、時間を守る指導が徹底されている。

中学校における教科担当の縦持ちについて

※横持ちに比べ教材研究の負担が大きいですが、縦持ちによるたくさんのメリットが出され、これも福井の大きな特徴であると議論されました。

その他 テキストの量が多い。質、量とも充実している。教科会で検討し、目的に応じてテキストを選んでいる。／教科会や学年会が時間割の中に組み込まれていて、週1回定期的に行われている。テスト問題の検討も教科会で行い、1問ずつ教科担当全員で検討する。

<福井の教育－生活指導について>

清掃指導について 無言清掃を徹底していることは福井に来て一番驚いた。福井を象徴していると思う。／全員が雑巾を持って水拭きをする。ほうきは使わない。／学期に3枚雑巾を使っている。椅子の下に自分専用の雑巾をかけている。／教員は声を出さずに、アイコンタクトや指さしで指導している。教員が声を出すことによって無言清掃が壊れる。／掃除1分前には掃除場所に行って黙想を始める。終わったら係の生徒が進行して、振り返りの時間を持っている。

生活時間の統一と教員の姿勢など 登校時間の厳守。7時55分には生徒玄関が閉まる。／帰りの会の時間も全学級そろえている。／帰りの会が終わったら、先生も着替えてすぐ部活に出る。副顧問も部活に出る。／放課後には職員室に教員がほとんどいない。／部活動終了後の下校指導にも全教員が対応する。／すべてのことについて、職員全員で対応しようとする雰囲気がある。

<国立教育政策研究所 千々布敏弥 総括研究官 の話>

- ・教員間の密なコミュニケーションによって、学習規律や生活規律の高い水準が学校全体で作られ、保たれていると感じた。
- ・今回の一番の発見は時間割に組み込まれている「教科会」。他県ではできていない場合が多いが、福井では県レベルでできている。これは福井のすごい強みである。
- ・荒れていた学校が規律をきちんと指導することによって、全国学力調査の成績が上がったという話はよく聞く。それが全県レベルでどの学校もできているというのは、福井の大きな強みである。その要因の一つに「教科会」があるのではないかと感じた。
- ・小学校では「学年会」。同じ学年集団に若手とベテランが混在しているはずで、その中で「どのような教え合いが行われているか」を見ると派遣元県との違う様子が見られるのではないかと。

全教員向け

浮かびあがる福井の課題

～これからの福井の教育の目指す方向を探る～

「本」や、「福井らしさを探る会」の中で福井の教育の特長がまとめられ、福井の教育の「よさ」が挙げられていますが、同時に福井の教育の「課題」も浮かびあがってきています。先ごろ発表された全国学力調査の結果も踏まえて、福井の教育の課題について整理し、今後の「福井の教育」の目指すべき道筋を考えてみたいと思います。

○子どもの自主性を育成する

全国学力調査の質問紙調査の中で、今回に限らずこれまでもよく指摘されているのが、福井県では、予習や復習に取り組む時間が全国平均を下回っている点です。福井は宿題の量が多く、「宿題をする」ことの指導が徹底されているのが特徴であると、「本」でも報告されています。家庭も「宿題をする」ことに協力的であり、学校現場と家庭の指導がうまくかみ合っているものと思われます。ただ、「宿題をする」と「予習・復習をする」ことは両立しない面もあります。多く出された宿題に時間をかけると、自主的に予習・復習に取り組む時間が確保できないことになるからです。子どもたちに「自主学习ノート」を持たせて自主学习を推進しようと工夫している学校もあるようですが、子どもたちの意識は「自主学习という宿題」という認識から抜け出せていないようです。教員の中にも、「宿題をしっかりとこなして1日に必要な学習時間が確保されればそれでよいのではないか」という意識が根強く残っているようです。「自分で計画的に学習に取り組む」子どもを育てることが、これからの課題として浮かびあがってきています。

○「群れる力」から「交わる力」へ～突出した力を見極めて伸ばす～

志水宏吉氏は、「福井という地がもつ社会環境が子どもたちの健全な『群れる力』の育成に寄与している」と述べられています。福井の子どもたちは学校・家庭・地域に支えられた安定した環境のもと、「すくすくと育って」います。これは福井の長所であることは間違いありませんが、その一方、志水氏は、「交わる力」の育成を課題として指摘されています。

子どもたちは、「群れ」の中で落ち着いて様々な活動に取り組みながら、十分な「力」をつけて「すくすくと育って」います。ところが「群れ」を出て、新しいもの・異種なものとかかわったり、協働活動を行ったりできるのでしょうか。大人も含め、「福井の人は控えめで自己主張が下手である」と指摘されていることと無関係ではないでしょう。このような力を、志水氏は「交わる力」と表現しています。（「本」では述べられていませんが、10月16日に行われる福井教育フォーラムの講演会で、「交わる力」の育成について解説していただける予定です。）

また、「群れ」の中にいると、強烈な個性や突出した力は、見逃したり押さえ込んだりされてしまいがちです。今こそ、教員も子どもたちも「井の中の蛙」から脱却すべきで、「群れ」の中の世界しか知らないために、自分の可能性を眠らせている子どもたちがいるはずで、子どもたちが「群

れ」の安定した環境を出発点として、「群れ」を飛び出して次の世界に進めるよう、教員は、外の世界を提示したり眠っている可能性を発見したり、適切に支援していかなければなりません。

○「不易」を守り、新たな道筋を切り開く

志水氏は「日本の教育の伝統的な不易の部分が福井では色濃く残っているが、今後はその不易の部分さえも変化していく時代がやってくる」と指摘されています。「時代の流れだから仕方がない」と改革に舵を切るのか、「いやまだまだやれる」と旧来のやり方を守り続けていくのか、見きわめることが重要になってきています。

そのためには、教員が視野を広げ、大局的な視点を持つことが大切です。忙しい毎日の中で、目の前の子どもたち以外のことに目が向かないのが正直なところかもしれませんが、子どもたちの将来を見据えた指導のためにも、教育以外の世界も含め、普段から様々な情報に敏感になっていただきたいと思います。教育の「不易でなければならない部分」を大切にしながら、時代に合わせた新しい考え方が必要な部分はしっかりと取り入れ、新たな道筋を切り開いていかなければならないのです。守るべき大切なことと新しい時代に必要な部分とを見きわめられる教員であり、福井県であるべきだと思います。それが福井発の全国へのメッセージになるのではないのでしょうか。

報告 としま教育フォーラム

報告
全教員向け

としま教育フォーラム

～福井の教育について発信しました～

東京都豊島区教育委員会は8月20日に、「としま教育フォーラム」を開催しました。豊島区は秋田県能代市と教育連携協定を結んでおり、協定に基づき開催されたのですが、このフォーラムに福井県からも参加し、教育研究所牧田秀昭調査研究部長が福井県の教育の様子を発信しました。



【第1部】牧田部長の発表の様子

【第1部】授業提案

豊島区立中学校主幹教諭の授業提案と、能代市教諭の授業実践発表のあと、牧田部長から発表がありました。

牧田部長は、まず福井県の授業名人DVDからポイントとなる授業の場面を3か所拾い上げ、発問の流れやねらいについて解説しました。そのうえで、以下の点について説明しました。

- ①授業の流れの「型」を作るわけではなく、学習内容や個の実態に合った授業構成を最優先すること
- ②生徒の主体性を導くうえで「課題・教材の工夫」と「仲間とつながる工夫」が大切であること
- ③1時間で完結するのではなく、単元全体の構想の中で次時への展望を提示すべきであること

【第1部】授業提案

豊島区立中学校の授業提案（理科）
豊島区立池袋中学校 主幹教諭 牧野 崇
秋田県能代市の授業実践について
能代市立湊城西小学校 教諭 嶋田康弘
福井県の授業実践について
福井県教育研究所調査研究部長 牧田秀昭

【第2部】シンポジウム

「学力の二極化にどう対応するか」をテーマに行われました。牧田部長は「福井では二極化はそれほど進んでいない。二極化を防ぐ最大の要因は『授業への全員参加』だと考える。これまでの学習内容、子どもたちの過去の経験、さらに子どもたち同士を先生が上手につないで、活動や発言がしやすい環境をつくるのが大切である。」と提言しました。また豊島区の先生方へ、「生徒に探究させ、生徒に協働して学習させることができる教師とは、教師自身が探究し、周りの人と協働できる教師であると考え。私たちはお互いに『いつまでも学び続ける教師』であり続けたい。」というメッセージを発信しました。

【第2部】シンポジウム

「学力の二極化にどう対応するか」
能代市教育委員会教育長 須藤 幸紀
福井県教育研究所調査研究部長 牧田秀昭
豊島区立池袋中学校 牧野 崇 主幹教諭
豊島区教育委員会教育長 三田 一則

連載

「希望学」⑥ ～ 宇野重規氏インタビュー～

いよいよ最終回です。最終回は東京大学社会科学研究所教授の宇野重規氏です。連載のまとめの意味もあり、福井の子どもたちや教員に伝えたいことを中心にお話をさせていただきました。

宇野 重規（うの・しげき）

東京大学社会科学研究所教授。1967年東京都生まれ。

専門は政治思想史、政治哲学。千葉大学法経済学部助教授などを経て現職。

おもな著書に「トクヴィル 平等と不平等の理論家」（講談社選書メチエ）

「<私>時代のデモクラシー」（岩波新書）、「民主主義のつくり方」（筑摩選書）など。



○福井の多様性と進取の気性

福井は、歴史や文化がかなり異なる二つの地域が一つになった県であるため、各地域に特徴的な歴史や文化があります。このような多様性が豊かさとしてつながっていけば、大きな地域力・発展力になります。福井は元来、「進取の気性」が強い人材を輩出している地域でもあります。たとえば松平春嶽は、幕末に日本の近代の突破口を開いた一人です。東京大学の初代総長（渡辺洪基）も福井で生まれています。福井は歴史的に見ても、イノベーターのDNAが残っている地域なのです。

○福井の高校生に伝えたいこと

人口減少は昨今の地方の大きな課題ではありますが、福井から飛び出して、外の世界を知ることが大切です。福井以外の様々なことを知ると同時に、外からの目で福井の良さを発見することができます。そして外部とのネットワーク・知識・仲間を持ち帰ることにより、福井の豊かさをさらに強化できると思います。外に出たうえで、「福井を選び直して」ほしいのです。

次に、自分にふさわしい「場」を見つけてください。自分が今何をしたいのかを考え、自分の持っている知識・スキル・経験が発揮できて、存在感を持って輝けるような「場」を探し続けることが大切です。外で見つかるならそれでもいいですが、福井とのつながりも大切にしてください。

○福井の先生方に伝えたいこと

福井の方は、他の地域のことを意外に知らなかったり、福井の豊かさを認識していなかったりということがあるのではないのでしょうか。先生方にも、福井の各地域のことをよく知り、福井の良さを子どもたちに語っていただきたいと思います。「福井の多様性は豊かさであること」「福井はイノベーターを輩出してきた地域であること」を強調していただけたらと思います。

子どもたちが高校を卒業する際に、先生方がどのようなメッセージを送るかも大切です。外に出ていく生徒に対しては、福井はいつでも戻れる場所であるというメッセージを送り続けていただきたいと思います。そして先生をはじめとする上の世代の使命としては、地域に残った（戻った）若者が自分たちで「場」を見つけられるよう、サポートしていただきたいと思います。そういう循環をつくる上では、先生方がキーになると思います。

福井は歴史的にも豊かで、県民の満足度も高く、相対的には日本の中でも有望な地域です。しかし、この財産を使い果たしてしまうという危機感は薄いようです。過去から受け継いだものをどうやって未来につなぎ、希望を持って踏み出すのか。恵まれた地域だからこそ、全国のモデルとなることを期待しています。

（平成26年2月19日ご本人にインタビュー）

公開授業
報告

中高の接続に焦点を当てた授業で

中高授業改善交流会（理科・地学）が行われました

H26. 6. 26 於：高志高等学校

□公開授業 ・授業者 上山康一郎教諭 ・授業クラス 2年6組 ・授業内容「地学基礎」 ・参観者 合計14名

－中学校での学習内容をさらに定着させるために、モデルを作成・活用する授業－

3種類の発泡スチロール半球を利用して地震波のモデルを作成し、震央・震源の決定のイメージを持たせる

中学校1年の「大地の成り立ちと変化」の単元は、震源や震央、P波やS波の地震波の特徴、初期微動継続時間などについて学習しますが、地震波の伝わり方を立体的にイメージすることが難しく、教えることに苦勞する単元の一つです。高校の「地学基礎」の教科書では、中学校の内容をさらに発展させ、3ヶ所以上の異なる地点で震源距離が分かれば震央や震源の位置を求められることを、平面図および立体図な図で説明しています。

本時では3種類の大きさ（9cm、7.5cm、5cm）の発泡スチロール半球を用いて、段階的に地震波のモデルを製作し、震央・震源の決定のイメージを持たせるとともに、震源距離と震央距離を利用して震源の深さを求められることに気づかせることをねらいとした授業が行われました。

生徒たちはグループで協力してモデルを作成し、3つの半球が重なると1点で交わることや、その交点が震源となることを自分たちで見つけ出し、理解を深めることができました。



授業の様子



モデル作成の様子



生徒が作成したモデル（表側）

□研究協議会 ・参加者 合計9名

＜授業者のコメント＞ 震源を特定するためには、3地点の震源距離のデータが必要である。「地学基礎」の教科書には本時の内容である「P S時間から震央と震源をさぐる」ことについて、平面図および立体図な図で説明しているが、地下での地震波の伝わり方をイメージすることが必要と考え、立体モデルを作成する内容を組み込んだ。そこから震源の深さを求める式を導き出すところまで持っていった。時間があつたら問題演習もさせたかったが、モデル作成に時間がかかってしまった。

－質疑と協議の中での話題をピックアップ－

＜高校教員＞

- ・現在文系クラスの地学基礎を教えているが、授業時間数が少なく、なかなか実験をすることができない。授業では毎時間ワークシートを作成し、パワーポイントのスライドを見せながら、板書もしている。ノートを書くのが遅い生徒もいるので、プリントに記入させ、毎時間集めて点検している。
- ・モデルの作成は実感を伴って理解することができるので、非常に有効だと思う。しかし、グループで作業をすると、どうしても作業に参加しない生徒が出てくるので、1人1人の技能の向上につながらないこともある。

＜中学校教員＞

- ・最近では中学校でもパワーポイントを活用して授業の説明をするようにしている。難しい言葉は耳で聞いているだけでは分かりにくいので、図やモデルなどを示して説明するのはとても有効である。今日の授業の中で「面を共有する」という説明があつたが、言葉の理解が難しかった生徒もいたと思う。
- ・中学校の教科書には地震波の伝わり方の概念を形成するような図がないので、このような立体モデルを見せるだけでもイメージを作ることができて、とても有効だと思った。
- ・高校の授業という講義形式のイメージが強かったので、今日の授業は非常に中学校のスタイルに近い授業だったと感じた。このような実習は天体や地震などの空間概念を形成するために非常に有効だと思う。
- ・今日の授業では3つの半球の重なり具合をそれぞれのグループで生徒たちに任せていたが、一つの地震の例をあげて半球の中心の距離を指定した方が、具体的な地震のイメージを持ちやすかったかも知れない。
- ・本当はもう少し大きな発泡スチロール半球を使うと、細工もしやすいし、より分かりやすい。しかし、大きくなると値段も高くなるので、その兼ね合いがある。カッターナイフも歯を長く出さなくてはいけないので配慮が必要。発泡スチロール用の電熱線カッターがあると、より簡単に作成することができる。

＜仁愛大学 伊佐公男 教授の助言＞

- ・このような具体的な活動を取り入れてもらえると地学分野はもっと面白くなる。地学分野はなかなか実験や体験的な活動を取り入れることが難しいが、一つでも多くの実験を福井発で開発していただけるとありがたい。
- ・カッターナイフの使い方一つを見ても、器用に使える生徒と、そうでない生徒がいる。理科の授業だけで教えることではないが、道具の使い方については小学校のころから少しずつ経験を積ませてスキルを育てたい。

※この授業の様子は、教育情報フォーラムでも公開中です。

福井教育フォーラム

主催：福井県教育委員会 共催：日本教育新聞社 後援：文部科学省 協力：福井大学教職大学院

「福井から変える 日本の教育」
— これからの学力向上の方策を探る —

10月16日(木) 13:00~17:00

(12:00 受付開始・13:00 開会)

フェニックスプラザ (福井市田原1丁目13番6号)

10月17日(金) 9:00~(午前)

福井県内の小・中学校・高等学校

定員 500名

*定員になり次第締め切ります

<1日目(10月16日)>

①記念講演(13:20~14:20)

演 題 「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」
講 師 大阪大学大学院人間科学研究科教授 志水 宏吉 氏

②シンポジウム(14:30~16:45)

テ ー マ 「考えよう、これからの学力向上に大切な視点」
シンポジスト 大阪大学大学院人間科学研究科教授 志水 宏吉 氏
文 部 科 学 審 議 官 前川 喜平 氏
東京大学大学院教育学研究科教授 秋田 喜代美 氏
福井大学大学院教育学研究科教授 松木 健一 氏
茨城県阿見町立朝日中学校教諭 高柳 宏子 氏
福井県教育委員会教育長 林 雅則 氏
コーディネーター 日本教育新聞社編集局長 矢吹 正徳 氏

③意見交換会(17:30~18:30)(希望者のみ・会費制)

<2日目(10月17日)>

学校公開と本県教員、児童・生徒とのディスカッション(9:00~)

- ①授業名人による身のまわりの事象を活かした算数指導(福井市旭小学校)
- ②授業名人による身近なものを教材として活用した理科指導(福井市進明中学校)
- ③授業名人によるペア活動等で文章理解を深める英語指導(福井県立丹生高校)
- ④一つの部首からつながりのある複数の漢字を学ぶ「白川文字学」漢字指導(福井市宝永小学校)
- ⑤無言清掃・礼などを重んじた生活指導を基盤とした学習指導(永平寺町永平寺中学校)
- ⑥教職大学院と連携した教科センター方式での授業研究(坂井市立丸岡南中学校)

*申し込み先 日本教育新聞社編集局 FAX 03-5510-7822

seminar2@kyoiku-press.co.jp 締め切り 10月14日(火)

*問い合わせ先 福井県教育庁学校教育政策課

〒910-8580 福井県福井市大手3丁目17番1号 ☎ 0776-20-0295

教育研究所からのお知らせ

通信型研修が始まりました

インターネットを利用し、いつでも、どこでも、どんな端末でも受講できる新しい教員研修が、8月1日からスタートしました。通信型研修の受講登録は、教育研究所のホームページから個人でも学校単位の団体でも申し込むことが可能です。

現在、通信型研修では13講座を配信しています。いずれの講座でも、基礎的で汎用的な内容を10分程の動画教材に編集しており、1つの講座を60分程で受講することが可能です。

12月末までに30講座、年度末までに60講座の配信を予定しています。ぜひ、自己研鑽や校内研修にご活用ください。

福井県教育研究所 通信型研修講座

Home

コースカテゴリ

- ▷ 通信型研修のご紹介 (1)
- ▷ G000～ 授業改善に関する研修 (4)
- ▷ G200～ 教育相談に関する研修 (1)
- ▷ G300～ ICTIに関する研修 (3)
- ▷ G500～ 学校改善に関する研修 (2)

通信型研修のトップ画面

通信型研修の申込み・受講はこちらから <http://www.fukui-c.ed.jp/~fec/tuusinhp/tuusin.html>

秋の実践型集合研修について

※各講座の内容等の詳細は『教職員研修講座案内』をご参照ください。

10月21日(火) C604 『アサーションで見え方が変わる』

アサーションの基礎を学び、アイ・メッセージやさわやかな自己主張の演習等を行います。

10月31日(金) C902 『ファシリテーションの理解と活用《授業編》』

対話と学び合いを生む授業づくりを学びます。講師は発創デザイン研究室の富永良史氏。

会場の都合により受講できない場合もあります。早めにお申込み、お問い合わせください。

訪問研修について

ICT活用、教育相談、授業改善等について、教育研究所員が各学校を訪問し支援しています。本年度から市町教育委員会と連携した学校訪問も実施しています。少人数の研究会、学習会に対しても所員を派遣しますので、まずは電話でご相談ください。



タブレット活用に関する校内研修

〔秋から冬にかけての校内研修の事例〕

- ・ 研究授業や公開授業に向けて、学びの見取りに焦点化した研究会の企画運営を検討する。
- ・ 「タブレットPCの活用に適した教室レイアウト」をテーマにした勉強会を実施する。
- ・ ネットいじめに関して、SNSの特徴を理解し相談に対応できるようになる研修会を行う。
- ・ 学年会が学級経営に関する学習会を3回計画し、その1回目に研究所員が話題提供を行う。

教員研修に関する問い合わせ先 教育研究所 研修部 Tel (0776) 36-4857 Fax (0776) 36-4860

参考図書



■大岡信「日本語の良き使い手となるために」 太郎次郎社(採用内定者研修図書)

……いま書いたことから賢明な読者はおわかりのことですが、この本は、日本語、また「ことば」についての、ハウツー式知識やご明答をご披露しようとするものではありません。冒頭第1章のタイトルからして、その意図は明白だと思っています。すなわち、「ことばは知識ではなく、体験である」。この本が新しい、本質的なことを考えようと思う読者たちに出会えることを願っています。(序文より抜粋した著者のコメントから)



■リチャード・ドーキンス「利己的な遺伝子」 紀伊國屋書店(採用内定者研修図書)

「なぜ世の中から争いがなくならないのか」「なぜ男は浮気をするのか」一本書は、動物や人間社会でみられる親子の対立と保護、雌雄の争い、攻撃やなわばり行動などが、なぜ進化したかを説き明かす。この謎解きに当り、著者は、視点を個体から遺伝子に移し、自らのコピーを増やそうとする遺伝子の利己性から快刀乱麻、明快な解答を与える。初刷30年目を記念し、ドーキンス自身による序文などを追加した版の全訳。(Amazon ウェブサイトより)



■山口良治「信は力なり」 旬報社(採用内定者研修図書)

数々の名勝負、名選手を生んだ伏見工業高校ラグビー部。教育者・指導者としてひたむきに夢を馳せる「泣き虫先生」と生徒たちの23年の人間ドラマを通して、親や教師、そして現代の社会が忘れていた真の優しさが見えてくる。(Amazon ウェブサイトより)

芦泉荘からのお知らせ

☆温泉は源泉掛け流し
☆ご夕食はお部屋でごゆっくり

カニスキコース

期間：平成26年11月15日～平成27年2月28日まで

1泊2食付 お1人様 13,500円



☆☆☆他にも、カニをふんだんに使用した「カニ満足コース」、ズワイガニ1杯付き「蟹御膳」もご用意！詳しくはインフォメーションをご覧ください☆☆☆

詳しいお問い合わせは
芦泉荘(0776-77-3200)まで
HP www4.ocn.ne.jp/~rosenso/

○2名様よりご利用いただけます。
○1名につき芦泉荘宿泊利用補助券2枚使用することで5,000円割引が受けられます。
さらに契約施設・旅行者取扱宿泊利用補助券2,000円も併せて使用することができます。

バックナンバーをホームページに掲載しています。

福井県のウェブサイト「学習・教育」のページに教育情報誌「明日への学び」のバックナンバーを掲載しています。(<http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gakukyousei/asuhenomanabi.html>)

明日への学び

で検索してください。

ご意見をお寄せください。

住所：福井市大手3-17-1

連絡先：福井県教育庁学校教育政策課

TEL：0776-20-0295

FAX：0776-20-0668

Mail：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp